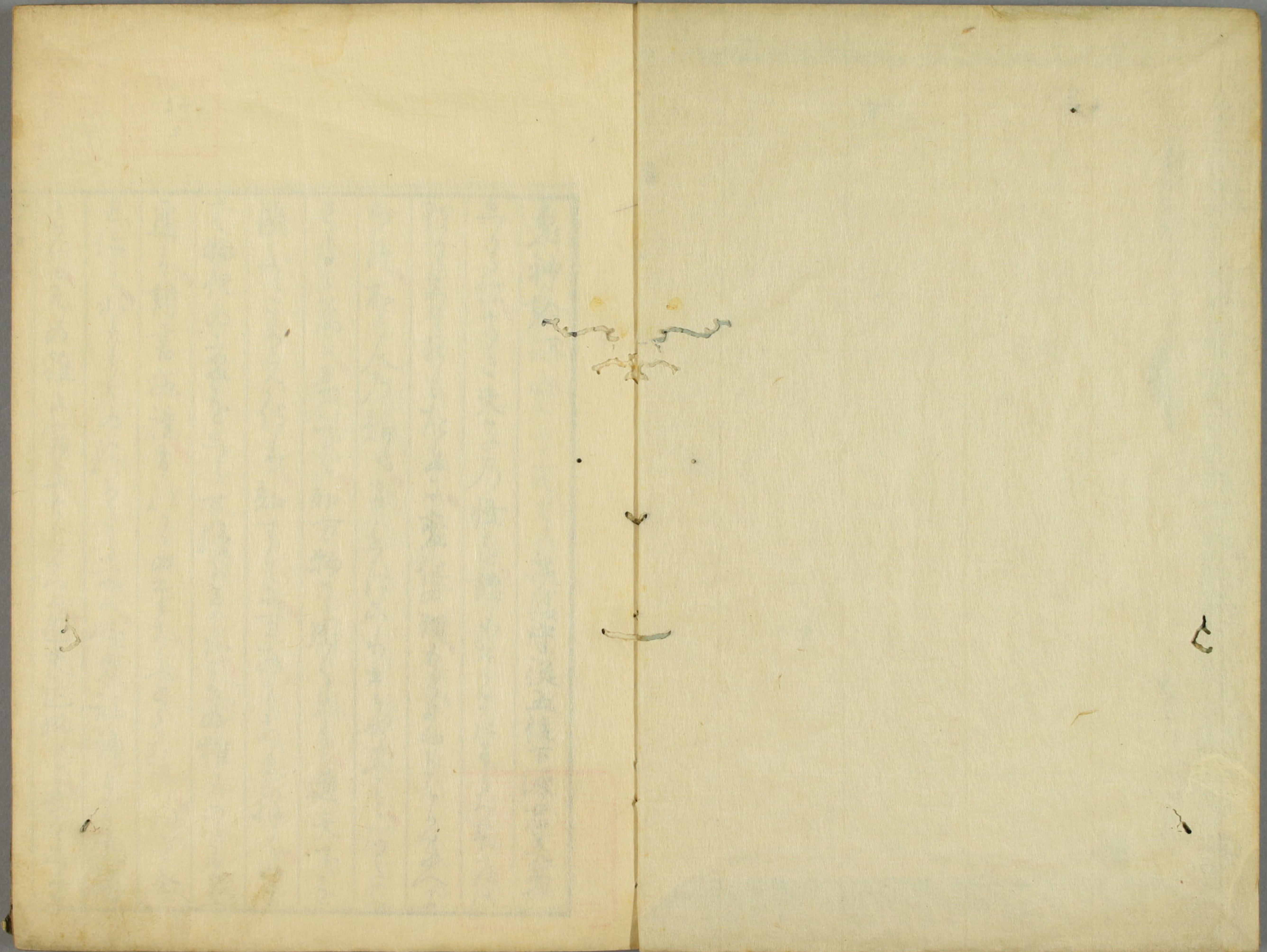


林經

下冊

□ 13
34
2止







門波
號 34
卷 2

鬼神論下

筑後守從五位下源君美著

うはあゝ夫子乃怪を語りやまらばとて

理ありたるなま変化の理りともやとて

らば聖人乃知らばとてにやまらばとて

とてと爲る易みと知万物の周く

漸くともん信り知すてふ方ありあま

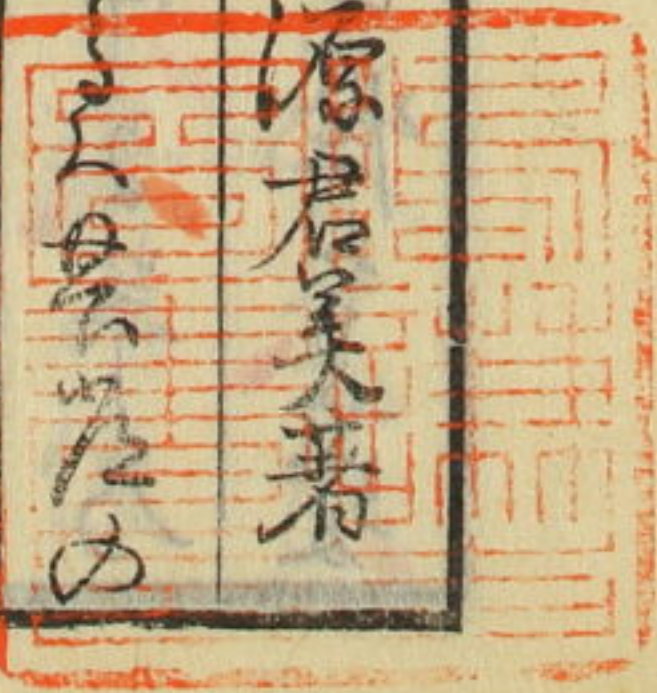
で物化のまをさうせ給ふとむうの雅

慶も詩書執禮ありぬのまありと

と仁とかきくぬ給ふとぬ怪力乱神

しとてその雅小宮とてとて匹夫匹婦

鬼神論下



ちてくくす屋よ慶みくくす移り信ひかゝる
きやうんさる所をいゆる今乃急年あゝに後
ちづらちちなんものありこれ聖人のよく人を
ちいさまよ慶みくすれらちこれ道天下をすく
あゝ所なるとくむく神鳥の所は九別金の
九牧くくく九牧ハ九乃乃九乃乃鳥を鏡とまひく山川
奇怪百物を圖し流し人をもくす并きとまひく
くめ言くくくくくくく其祥瑞定まひく夫は
あゝ孝く代も并をうかめくくおの並の仲も年乃
有るを握りて同くあゝせに木石の怪も其變

蜩蟬水乃怪と龍罔象土の怪を續年とあゝく
あゝ高年舞とく大なる玉にへき車を齋の使
ふを言んきやうくく類のくくくく聖人の知やま
わふあゝあゝ有玉足の鳥舞とのりやを常く候くく夫は
あゝあゝ家語くくく詩書執禮のほむくくくくく
あゝあゝは附たりては海に怪くくくく車もあゝ
くくくくみへくく山海神異等の経搜神述異等
の記のあゝあゝかの怪を怪の書世くくあゝ或
疑くへく或く信くへくくくくくくく山川奇怪百物
末石水土乃怪もすくへくく山原くく暗くあゝあ

ちげきるぬ處と日乃ちんをねらふはく陰陽の
 の事あつらひの書く百の怪をせむるこいひの書
 しく世園をせむる書この書はあつらひの書に
あつらひの書に
あつらひの書に神鳥
 ちげきの書の記述にたすいし人その言に何ん
 一に為の所はくあるに人あつらひあつらひ乃
 類く若くはあつらひあつらひあつらひあつらひ
 といふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
 諸の身をやとんてらの處水あつらひあつらひ
 する事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
 のつらひの書水あつらひあつらひあつらひあつらひ

の夢よ人あつらひあつらひあつらひあつらひ
 相あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ
 かまも居る人あつらひあつらひあつらひあつらひ
 あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ
 はんあつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ
 家あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ
 人鬼の怪あつらひあつらひあつらひあつらひ
 此陳蔡の書あつらひあつらひあつらひあつらひ
 の長九人あつらひあつらひあつらひあつらひ
 けしあつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

の人を驚くは子貢すみくひくはるまゝなむと
いふ處を宙より見上げて、孫平はくまゝ子路にき
く。庭よりおこすまゝの勝之んはかまゝ
くは、夫子よりこれききんききまは彼の男は
かまゝ乃同なるあつて何とてまゝかまゝ
みくひはるめあつていぢりてまゝにせ
まゝあつて上よりききんききんは孫平は子路
しるはるるらんが、おすまゝをくまゝ大ま
疑ふの九尺節りするまゝあつて、夫子よりま
あつて、けものちまゝまゝ吾まゝ物老あれん

群乃精、これよりおぼろげに言の物より、亀現、奥、亀、草
木の類より、まゝくまゝくまゝの神、これよりまゝ
妖怪をまゝくまゝくまゝは、是れ、五、角、と、いふ、行、乃
あつて、まゝくまゝ物あり、酒、と、いふ、まゝ、老、と、いふ、物、老、
時、まゝ、怪、を、まゝ、くまゝ、くまゝ、を、救、せ、し、まゝ、くまゝ、
う、れ、ん、まゝ、くまゝ、くまゝ、くまゝ、くまゝ、
披衽記、衛波、侍、まゝ、くまゝ、くまゝ、くまゝ、
まゝ、くまゝ、くまゝ、くまゝ、くまゝ、くまゝ、
類、老、と、いふ、まゝ、くまゝ、くまゝ、くまゝ、くまゝ、
の、老、と、いふ、まゝ、くまゝ、くまゝ、くまゝ、くまゝ、
あ、や、大、原、乃、王、仁、裕、遠、祖、女、二、百、餘、集、ま、り、まゝ、

鬼申論下

ちいさくちやれりて行はれど後年長テ三四人あす
 きては眼白く暗碧なり侍飲食のりる玉のてみ
 さらば夜をほくも寝つゝあやたよ一なるあやうき
 中らゆのまにんてにまてさやも程を寝てあし
 東よりづちんおつらむりりいよとてはつ一の柳
 此れまて封一さのそほあやさ所よたのそ
 自給出らんほもあひうほしうけおふいしきを
 高きまてしよははまらぬしそれそはは孫
 ちいさくちやれりて行はれど後年長テ三四人あす
 きては眼白く暗碧なり侍飲食のりる玉のてみ

打ちきててんふあはまある鉄の鏡よきうさ
 ちいさくちやれりて行はれど後年長テ三四人あす
 きては眼白く暗碧なり侍飲食のりる玉のてみ
 さらば夜をほくも寝つゝあやたよ一なるあやうき
 中らゆのまにんてにまてさやも程を寝てあし
 東よりづちんおつらむりりいよとてはつ一の柳
 此れまて封一さのそほあやさ所よたのそ
 自給出らんほもあひうほしうけおふいしきを
 高きまてしよははまらぬしそれそはは孫
 ちいさくちやれりて行はれど後年長テ三四人あす
 きては眼白く暗碧なり侍飲食のりる玉のてみ

といふものをもて修験の高僧のたのむるを
經は佛教の上も鬼神の属とてみしつゝと鬼神をけ
きし併度おとつて佛とすれども一靈鬼ありとの
事をも傳れぬ尚書身すしてに鬼をたす行つて人をも鬼の
まゝに接せしむるありとあるべしやまねざるべ
かふもれに似たる事もたゞ今も唐の時蜀乃
國より佛きたり大會を設けしむらつての足物有
りつゝの甲より十歳とある童兒の一才の童女年の上めて
うくを舞ふあかると人まゝある海つてうきと
うちにならやれり鶴のこゝに記され飛來りてせむら

かぶさりたる人大よおとれきまけあめぬ數日乃
後高き塔のうへにありとある父也えつまつてのむら
りつゝと登り得るをしつゝありとありて居
る程をて人ん地をちりし後佛寺の壁に繪けし
飛天夜叉のさきももの為りいふありとありて塔乃
は入らんと後日とあるものもむらむら飲食の物を
とむらむらといふものも一尚書が實よりんて傳
飛天夜叉といふものと鬼乃かつて地をて聖天といふ
ものもや佛の夜叉は樹の角ありて形の異なるものなり
飛天夜叉は樹の角をちりて人ん地を
いふゆゑ天狗のまゝといふものも似たりとあり

くハ山林冥霊のやうなるもの乃木原の怪ありし
 迷異記ふらんしハ山都函咄録に云くハ本居名あり
 いふもれ其あつらも物いしんちんきりく人のこくはそ
 足の内をのこくは山都函山都函の山都函にま
 くら路よするんてよくな化しんてその形をみるごと
 ちねちんといふく水ら母たりん天物よ似たり山都
 いぬと嶺南の山都函似たり河録雜事山都函といふ日南
 南丹等北地の野女野婆といふなり野女と博考野婆と
有東楚語
 河太郎といふもの不寐の徐積と盧川の河乃何なり
 ちのりくく小兒に鄰家
難志白澤園といふゆゑ封の敷あり

海小僧といふものも南海の海人がつら僧のころに
 すもぬる小まなかりといふも似たり尋本子猫きりといふ
 も金華の人れ家よ何れ猫三年れ後らく人をもと
 けとといふの類あり五雜俎大神といふも北戸子の地
 狼目折志の賈二書といに地才の
犬をりといふ白沢といふものも
 精を彭侯といふかつら馬き狢のぬしをといふの類
 ちけんえんこまをくろくくみありて妖術哉
 ちくまの事日南の空方の盛妻の事よ似たり五雜俎
 してその毒を人よあつらふてその外すく盛妻法
 るの名をらとまきしんて九きすといふぬありけ
 がらもあつらふて周禮に庶民ハ毒を盛を除去しと云

はらふとわれふと一んらん今も世に好法を修す
人乃妖狐を役使すも皆信る此邪術は
巫盃乃類ちる一のあつらふくきたをわくも
狐魅をいふあつて井とあつていほきのはけ
も清かちら^{チロナ}罇池ありて戸にあといぬあはしき
ちるむく狐をいひまのち一社乃何なりや
狐を射るせしむあまの社司をいひあは
けふうつたしにほはすあつちるく大納言
經信の卿白蛇此臭後す豫草の密調かぬる
とほのちいひて^一座を立給ふ^一をいひ^一事

すまありちれとせう一白蛇乃測るくらりて臭の
すあつらふ^一香^一一^一らあつて^一豫草といふもの
のちらふふ射らわて^一と天帝ふつと^一に
臭ふりと射らふも^一拍ちる^一豫草何の飛あるといふ
と伍子胥の呉王をいひあつて^一言葉よ^一出
けあつて^一經信御引まひ^一ちる^一
たあつて射る事ありあつて^一いふは
あつて^一人ありて^一あつて^一いふは
あつて^一いふは
あつて^一いふは^一狐池乃形^一ちる^一あつて^一いふは^一
狐池^一いふは^一いふは^一乃尊^一事^一あつて^一いふは^一
り^一妖狐毒池^一の人を^一あつて^一いふは^一

い川たつたふ家理やあふふさ水ら乃祀をいふ
みん信祀といふくもつと國禁まてやあやま
す登り先王此祀興るあははてわ。登る魚く
さる此神をまつるものと信祀なる信祀の福を
と付る曲礼李氏も泰山下旅せしを夫子れし
るまひりむこの理よりあつた色に淮より南を
古より信祀まつり唐の杜梨公その信祀一千七百
區をさかすれり夏乃禹伍子晋の二席をのこ
孫子の事唐書の本傳とす記る程朱の注よりあやま祀也。う程も伍子晋の
廟をさかすれりハさるる伍子晋を吳國乃

地さるる祭る魚は楚國の地よりあつた魚なり
伊川の程子論せしきるるはあはれとさるる信祀
祈禱かあつた慶想あることいふやその神より
あつたハアつたあはれいさるる人々精氣あつた
くさるるあつた乾君等韃大王乃あつた精氣
むう一汝南の人回乃仲ふ。烟をりあつた慶をさ
んさるるあつたあつたあつたあつたあつたあ
らさるるに道ゆく人のあつたあつたあつたあ
さるるあつたあつたあつたあつたあつたあ
あんもけさるるあつたあつたあつたあつたあ

伊神論

七

ちり山々へおちし鮎真のしるを細乃中よりいれ
 好まむとあうらるる影より細乃中へ来て鮎真の
 おみ乃中にあまるを見えくらゐのなまなまふへし
 ちもたがふていふちやのあも理神乃何をもいさ
 みやよこそあめれと大よあやしや村のなめごと
 むれよ里集らるるちやの借祠を建てる今中々勢
 鮎君と名づきまうしせりや村の者としやまよち
 りいゆとあめれくらゐの神神乃何とそふみよち
 不あちとていつたまる影何とふ神神大まよ作
 けしカハコトヤシの神まの村とぞあつるあとなしやあつ

めげんまき流神もどあめらるる七八年ほど経てあめ
 鮎真のぬしこの神社のほとめすおつていふ影の神
 神乃かきまわしれさせまふつむいふまをのあ
 ちいふにむし鮎真をわらるあふ阿まましそいれを
 るづりいごいぬおふし物をとといひりまはかの冥路
 の事ともさうちす此止ふるたがひ又芦浦といふふ
 るし人乃なまよとふくわねが川家ちやて樹乃
 枝乃かけてるさくまよち東なる人まよりら
 ちんははれよすまし人のしりに捨くお取
 過くる人皆わらむくすのむと後まらわら

くは乃負幾百千とひよとをたつ何者のきた
むねより草鞋大玉と名を題しつゝ後より賣み
御社をとたつしつゝまきつ保ちよに靈異んふ
らと何はる彼らにんまらつらつとせらつ
人交をすぐれ母つのおとを聞ておつたふ
おと誠とつて處れおはるもの死せつら
つとつらつらつらつらつらつらつらつらつらつ
孝子乃道をもつと世に治むるときはつらつらつらつ
らつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつ
張氏乃つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつ
張氏乃つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつ

五雜俎

際すつた文おとつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつ

は日戸ハ下司のこの司戸其様をうらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつ

ふ軟つらつ

らの初年入つらつ

らつ

とつらつ

らつ

らつ

らつ

らつ

彼方類々地の方類はるの性まはめて靈あるを
 かりて像の申す靈を玉くその天候を守るるの
 あるまればあめおしよふの司戸が兩脚の靴へハ
 ありての神をわたりてふん乃りてはあてまは
 みるはわらわをくまるとに神明よりさしりてと
 おりよるる附くをまるとはゆるる金うわらわ
 紫陽の集子らわらめ事論してすべりて民
 をりてこれに淫祀をわたりて理をよく信せし
 疑い方るるあてむ後予くそ中詞をばあは
 つへりまをくはくわの民水旱みも疾疫もあは

神よりわけていめわらむるまをわらふては
 すべらわらるるんみらうやまはうとやるもの心かを
 原うんまむりてに里の人物よりあつとら
 土をまつて造るはる大餅方像阿よとある人らの
 首をまきりて落しとる所のものともあつたりて
 屋く鬼ふらの像の首より金利おろくおつたりて
 土よいうを花らのものを生守へまをてこれ人の心
 方いつら候をころわめとていつ金をんをわら
 おぼゆるるるに淫祀の鬼神方外に其路を
 あはりてまあわくは思は義士の死くくらの靈

魂と魄のつらきあせさるるもわがて祀乃いのを
 法民のほごう一死をひく事を法とせん勞を以
 て國を定めよく大なる苗をぬせよく大なる
 患をよせきり一は乃人めて其御國より一は法を
 みせしるべき所の一は施となすまをひくハ今佛母
 佛のつるも又法祀をやひくをひく佛の西域の
 仁人なりわのよめしるるのづう天地ありて是は
 一は法を天照大神乃佛す衆の豊草草原の中は
 國をわしきまわしよるるのめりてせしむるま
 けりせん法を佛神とく九祀典の傳る佛名は
 阿耨多羅

他方くよの神すんまへりて此理ゆめや今も伊
 勢のふゆたをよはしむ事あり侍るまといひ
 よめ大宇寮をけりて國をよめ先聖先師をよ
 つるはれ保る事らハ其法を奉す信乃乃佛母
 ほうすんらんらんあ一のつてせのつてあらん法
 ほろろるるふらるるるるるるるるるるるるる
 祈禱めあつてふらるるるるるるるるるるるる
 むるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
 侍るの民の義を求む鬼神と敬く遠くくと侍
 るるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

おのが行ふに乃善くもぬむのあらも善くも悪くも
もともいふもいふもいふもいふもいふもいふも
より併しはうもいふもいふもいふもいふもいふも
民の義をいふもいふもいふもいふもいふもいふも
す此を悟りてはすもいふもいふもいふもいふも
ありしをいふもいふもいふもいふもいふもいふも
佛乃悲願ふもいふもいふもいふもいふもいふも
九品乃快樂をいふもいふもいふもいふもいふも
よりいふもいふもいふもいふもいふもいふも
禮を尽しはうもいふもいふもいふもいふもいふも
権勢

の人よ媚ひ諛らひて身をり我故をききてむも
人よ似てりへい忠良の心ありて孝子の心ありて
ともいふもいふもいふもいふもいふもいふも
きよもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
ぬもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
の化人ありての神りー靈ありはやくて不善の人
その感徳の心ありて人常をいふもいふもいふも
家より解きたりて積不善の心ありて解きありて
となりて人乃福ありて人乃福ありて人乃福ありて
はく人の福ありて人乃福ありて人乃福ありて

三世の事と説き流つるこそあらにすくきられよき
人の不幸あるも前世の悪報なり此罪とははぐまひ
てんまは後世ハかきくは善報をうくる處よまのあり
あきき人もあせの徳者くうりてくうかく今の世も
幸ハかかきくは善報なりすくよ是なる後ハ世も
らけ悪趣に墮ちへきまのくまがひよあるこは小きわ
道よりて大なるをまじ終るる説るへき福善禍淫
の事ららに天乃木のゆくまの理ありハあれたまひ
ひきてりふ^{くは}聖人^の徳^は只^のり^のい^は處^乃實^{なる}ふ^かれ^ハ家
あて^てこれ^を真^{なる}を^も賣^るる^の其^理ハ^たあ^きま^り似^{たり}

これハ易も善不善ともに積むとはみえくうり家と上
ハ父母より下け子孫なりあてて申しあのみ身旁に伯叔
兄弟ともに通くくくく名なきくくくばあきりい
ふハ三世より又世はくくくたあのみ一人なり聖人乃
實なる徳を上中下くくくく千百世といふやもた
部くく家もくくあはくくくくくくくく必^は世^も具^せり
人々の先まきくく信の人たりくくくく人の子孫衰
ふるくくくくくく世の人知くくくくくく慮^近くく家
百年の何ぶくくくくく事のくくくくつてあ^の天命^を終^る
くくくくくく積むくくくくく事^をま^きくくくく

阿のこやたふん抄のきわづき一ツの大善をたふと
 むよその善いふ大なりと積と形のいふ福を
 してはよ及ふへかま善あるをいふ世に事ある
 と傳れんそよ吾は信じて我徳をいふ一ツと
 天福をいふ一ぬへれ已も善をいふ一ツと
 いふも善世あり下つるいふゆる後世ありたの
 才いふ善ありと祖先の世の徳を積むといふその
 解はあはれありふ徳ありといふありたる徳と
 のつらむいふ善いふぬ人の福あるも徳といふ
 こと此世の積む人善なり徳ありといふ人まき

とき天のついで天定するて人ふつと傳はるか
 ようぬ人いふも小人なり小人かあるに才
 ありあまの才ありと世に媚む人ふるつと
 人をいふ事と才と人をいふ事とといふと後
 の世の人とや人といふ人またいふ人また
 一のたれとくいと人れかたの為といふむれ
 ありつと人ありたりといふ能ありといふ福の時
 逢ふ世に用いふ事とほつと人またいふ天
 才のものいふも百年といふ公議といふかた
 はわく又人を欺くといふ人のせいとつたあつた
 つき世に利いふ人のせいとつたあつた

人のせいとつたあつた
 つき世に利いふ人のせいとつたあつた

ありて人など諷いていふ事ありて、百のいのちをいふ事ありて、
 人なる縁をたたくて、いのちをせよ、阿かしら、天を
 するは人のかはれりて、いはばかの積善の業あり、
 阿か積不善の家、餘殃ありと、阿かしら、事何ん
 阿かまのへきりの佛を教へ、阿かはれ、阿か父
 阿か母の妻をすく、求むる道は、阿か母の
 阿か母の事、阿か母の身、阿か母の利せん、阿か母
 阿か母は、阿か母の善をたたく、阿か母の悪をたたく、
 福をうくること、阿か母の阿か母の阿か母の阿か母
 阿か母の阿か母の阿か母の阿か母の阿か母の阿か母

かれ、鬼の報えり、人の世にあり、阿か母の阿か母の阿か母
 阿か母の阿か母の阿か母の阿か母の阿か母の阿か母
 阿か母の阿か母の阿か母の阿か母の阿か母の阿か母
 阿か母の阿か母の阿か母の阿か母の阿か母の阿か母
 阿か母の阿か母の阿か母の阿か母の阿か母の阿か母
 阿か母の阿か母の阿か母の阿か母の阿か母の阿か母
 阿か母の阿か母の阿か母の阿か母の阿か母の阿か母
 阿か母の阿か母の阿か母の阿か母の阿か母の阿か母
 阿か母の阿か母の阿か母の阿か母の阿か母の阿か母
 阿か母の阿か母の阿か母の阿か母の阿か母の阿か母
 阿か母の阿か母の阿か母の阿か母の阿か母の阿か母
 阿か母の阿か母の阿か母の阿か母の阿か母の阿か母
 阿か母の阿か母の阿か母の阿か母の阿か母の阿か母

を設けしきりしきりその俗よりて導きしむる人の
 たりし一二世因果の通稱廻りのされんらの志のこころを仁
 ありその後のことばあるなりける人のうれはき方
 便の法よりて則衆生を度せんきとあこしといふ
 誠をまつて人を感せしめん事なりしなりし
 いくでん妻をもちぬるをほくおと程氏のいふん
 正しく大なることばなりしとてだに醫術の庸ある
 が二病を治するよりそのころよりしりすしにわの病を
 医せんとおもひしうらまの良医のぬきしりしなりし
 草のよりの毒おこししる事なりしうらまのゆき

かの金吾ん後の業の毒のころよりしりて舊疾を
 てはいゆることを得しとて新病あるを治すよりしりし
 へきとおもひてその方を接する事なりしなりし
 を治すことばなりしはこれよりしりし業なりし
 とし路より切あふおとぬるはこれよりしりし病
 を治すことばなりしはこれよりしりし病を治
 するに及んではいふは昔術拙きよりしりし病を治
 するに及んではいふは昔術拙きよりしりし病を治
 せんといはれしはこれよりしりし毒久しきよりしりし
 病を治すことばなりしはこれよりしりし病を治
 するに及んではいふは昔術拙きよりしりし病を治
 するに及んではいふは昔術拙きよりしりし病を治
 するに及んではいふは昔術拙きよりしりし病を治

夫一々女とハ死よつたれも悟らす海とよびつるや
 かの併め折一してつるも一と惡俗を導ふて善を
 傳せしめんとのあるぞ一めて予何れとすの教を
 夫教を君臣もあく父子も折く申して夫婦兄弟
 乃おしえんもあはれんぞ一官制を利せんとの
 ありとらふよと善をおとあらんとすれん惡つとく
 爲すにこれハいつへと佛に倣するれ人大惡ある
 の人なつとされん必ず陰惡あるの人ありとすれ
 ばいともゆる賢部のさつきとらふとてかたれとて
 求む何やあまきと行ふものたる也 中庸のち終るハ部の

るもき行ぬるもそなた乃道を嚴む一もあつる禮を
 せしむるに帝の飲食を節み一海の起居と
 時よするもは聖人此生を養ふつぬの道と
 あらハ此のや一とむいなやとあひすく一何とも業
 不ものも後するもあつていみ一へるも後業れ人
 忽ちつく甘き毒瘡一も命ををせし上も天子のや
 下ハ士農工商とらふまていくとらふ教をうけ世の
 心後ありておくらふり一身あるも人を人ま
 しくかの法をいともその人あり聖人乃折一えハ
 其のは下らま菽粟布帛乃用く小用ふへきとて

孝才五信の外もとぬすこい詩書礼禮のよき
こい雅う、宮つとつ海みしてかの怪力乱神のよき
語わらうはるもえたのうんも

鬼神論下大尾

[Faint handwritten text in vertical columns, likely bleed-through from the reverse side]

明和庚寅冬御免
寛政庚申秋出版

大坂書舗

高懸橋通

藤屋彌兵衛

心齋橋通

河内屋太助

大正書齋

寅起真申妹出翅
即喉真寅冬啣真

冠律拾...

高... 以... 所...

大正...

田... 大...



小...

